

若松賤子考

——結婚まで——

小檜山 ル イ

花嫁はとても美しく、まったく落ち着いていました。結婚式は横浜の日本人教会で開かれ、ブース氏が司式しました。花嫁は生成りの縮緬を着て、高価な帯を締め、それに合うネッカチーフ（半襟のことか？——筆者注）をしていました。式のあと、アメリカの女の子たちと同じように上手に夫と腕組みしました。それは、花嫁が夫と対等に見え、夫が妻を誇りに思っていることが明らかで、最初の日本人の結婚式でした¹。

島田かしと巖本善治の結婚式は、ユージーン・ブースの妻、エミリー・ブースによってこのようにアメリカに報告された。

この年の年頭に島田かしは数度咯血していた。

彼女はたぶんもうすぐ結婚するでしょう。しかし、良くて数年しかもたないと思います。ああ、説明のつかない摂理。誰が神の意図をはかれましょう！ 喜んで従うのでなければ、人は絶望に追いやられます。愛兄、私たちのために祈ってください²。

これは、ユージーン・ブースがRCAC(オランダ改革派) 海外伝道局主事のヘンリ・コブに書き送った手紙の一部である。結婚式に先立つ1889年6月1日、病み上がりの島田かしは、ヴァン・スカイック・ホールの献堂式祝賀会で「昨日と明日」という演説をし、教員生活に区切りをつけた。6月18日午後5時30分、結婚式が行われた海岸教会は、百合などの白い花で飾られていた。会場を葬儀と区別したのは、オルガンの上に飾られた松竹梅の鉢であった。式はすべて英語で行われ、大勢の参会者に見送られ、巖本夫妻は海辺の新婚旅行先に旅立った³。

島田かしの結婚式のこの様子に、華やかさや幸福というより、重々しい決断と惜別の思いを感じるのは私だけだろうか。島田の病を知る多くの参会者が、この「対等」な夫婦の容易ならぬ未来を予感しつつ、一時の祝祭を固唾を呑んで見守ったのではないか。いずれにせよ、式は彼女の半生の一つの到達点を示し、また、新たな責任的生涯の始まりを標す一大イベントであった。

1 *The Mission Gleaner*, Vol. 7, No. 2 (Jan. and Feb., 1890), p. 10.

2 Letter from E. S. Booth to Henry N. Cobb (Apr. 8, 1889), RCA Letters, フェリス女学院資料室蔵。

3 *The Mission Gleaner*, Vol. 6, No. 6 (Sept. and Oct., 1889), pp. 11-12. なお、当時オランダ改革派はアメリカ改革派(RCA)と名称変更していた。本稿では以下RCAを使う。

島田かしは、一般的に知られた女性ではないが、今日までかなりの研究が蓄積されている。その多くは、言文一致体を使った初期の翻訳者、児童文学者としての島田かし＝若松賤子に関する研究である。若松の著作リストがほぼ整備され、若松の翻案の元になった英語の作品の多くが特定され、文体の特質や変遷についての言語学的検討もなされている⁴。また、若松の生涯のあらましについても、資料が必ずしも十分でないなか、研究書の体裁は採っていないが、山口玲子『とくと我を見たまえ』（1980年）が先鞭をつけ、2007年には、本格的な研究書、尾崎るみ『若松賤子——黎明期を駆け抜けた女性』が出た。

若松が*The Japan Evangelist*等に発表した英文著作も近年は研究の視野に入っている⁵。筆者は、冒頭に掲げたような島田かしに関する記事だけでなく、島田が彼女を支援する教会の女性たちやミラー夫人（メアリ・キダー）宛てに送った英文の手紙の何通かをオランダ改革派婦人伝道局の機関誌『伝道落ち穂拾い』（*The Mission Gleaner*）に見つけ、『フェリス女学院一五〇年史』第二章の執筆に使用した（未公刊）。筆者がニューブランズウィック神学校にあるRCAの資料室でスキャンした『伝道落ち穂拾い』等は、フェリス女学院資料室に寄贈したので、今後、こうした資料を使った研究が進むことを期待している。

ところで、筆者は、北米出自の女性宣教師の研究をするなかで、若松賤子を北米発プロテスタント・キリスト教伝道の一環として展開された女子教育事業の「果実」⁶と捉え、北米の女性文化の延長線上に見ようとしてきた⁷。また近年、北米発の伝道事業が社会一般に与えた最大の影響は男女関係のあり方にもたらされたものだと論じてきた⁸。すなわち、北米出自のプロテスタント宣教師がその女子教育事業において、「愛に基づく」一夫一婦の結婚と「クリスチャン・ホーム」の実現、そのための新しい男女交際を提唱したことは、長いスパンで見た場合、大きな影響を日本に与えたと筆者は考えている。

本稿では、この観点から、大川/島田かし＝若松賤子⁹の結婚までの人生を考察してみたい。フェリス・セミナーが彼女にとって唯一の「ホーム」だったとはいかなる意味だったのか。セミナーの教育と生活は、彼女にどのような女性像、人生のイメージを抱かせたのか。巖本善治との結婚は、彼女にとってどのような意味をもっていたのだろうか。それは、かしをアメリカ的文化の延長線上にとらえるという筆者の従来の方法論を踏襲するものである。同時に、かしがフェリス・セミナーに住むようになって

4 若松賤子に関する研究史は、尾崎るみ『若松賤子——黎明期を駆け抜けた女性』港の人、2007年、第10章にある。

5 柴田亜由美訳「巖本嘉志子による英文の訳出（1）～（7）」『あゆみ』第36号～第41号（1996-99）は、このような関心の萌芽を表している。

6 これは、アメリカの海外伝道関係者の観点に立つ言い方である。

7 小檜山ルイ「米国婦人宣教師・来日の背景とその影響」国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士論文、1990年、第5章第1節で若松賤子を扱ったとき、筆者は確かにこの観点に立っていた。その後、若松についてまとめて考察するのは本稿が初めてだが、この間、筆者は継続してこの観点から若松に関心を抱いてきた。

8 小檜山ルイ「北米出自の女性宣教師による女子教育と「ホーム」の実現」キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館、2016年。小檜山ルイ「近代日本におけるキリスト教と女性」日本キリスト教文化協会編『近代日本にとってのキリスト教の意義』教文館、2019年など。

9 本稿では、名字は、論じている時期にかしが使っていた名字（大川、島田）を採択する。名前はひらがなで表記し、時々異なる漢字が当てられていたことを判別する煩雑さを省略した。文筆家としてのかしを論じる際には、若松賤子を使う。

た事情を、新しい資料から得た知見を加えて検討し、彼女を幕末維新期の日本という土壤に据えてみる。そうすることで、かしのフェリス・セミナリーの意味がより鮮明に見えてくるであろう。

1. 維新動乱とかし

1874年夏、大川かしはミラー夫妻（1873年にメアリ・E・キダーは結婚し、ミラー夫人となっていた）と共に夏を過ごし、その後ミラー夫妻の家に住まい、1875年6月に横浜山手178番に開校した寄宿学校としてのフェリス・セミナリーに入学した。かしは満10歳であった。

かしは1864年3月1日生まれで、会津藩士松川勝次郎の長女であった。フェリス女学院資料室所蔵の戸籍資料によれば、勝次郎は1834年に岩代国会津郡若松士族古川権之助長男として生まれたが、「同国同郡若松阿弥陀町松川栄亀平民」の養子となった。古川家の長男勝次郎がなぜ養子に出されたのかはわからないが、松川栄亀は、会津藩士で、戊辰戦争に参加後、新潟で謹慎した人である¹⁰。維新後、戸籍が整えられるまでに、平民籍を取得した可能性はある。松川家のあった若松阿弥陀町は、中・下級武士の住まいがあった場所である¹¹。

勝次郎は武芸に長じ、特に剣術と水泳は達人の域に達し、筆蹟にも優れて、藩公から硯を拝領したこともあり、藩中では白井権八というあだ名があり、眉目秀麗だったという¹²。また、藩主の松平容保が京都守護職につくと、京都に上り、諜報の役を勤め、島田という変名を名乗った。蛤御門の変では、会津槍組の一員として「鬼官兵衛」と呼ばれた戦士佐川官兵衛の指揮下で活躍したという¹³。

勝次郎の妻、すなわち、かしの母親については何もわかっていない。松平容保が京都守護職に任命され、家臣を率いて京都入りしたのは1862年12月であった。かしの誕生日から逆算すると、遅くとも1863年5月までには何らかの関係が成立していたはずである。ただし、勝次郎が1834年生まれで、一般的に当時男性も早婚であったことを考えると、容保の京都入り以降に京都で婚姻が成立したとは考えにくい。

いずれにせよ、後に若松賤子が*The Japan Evangelist*に寄せた幼児の記憶（英文）によれば、鳥羽・伏見の戦いの前夜、かしの母親は京都に住んでおり、母親は妊娠中であった。かしは母とともに戦火を

10 「会津藩北越高田謹慎名簿」『会津史談』第46（1972年）、101頁。

11 かしの戸籍は、尾崎、42頁注1に引用されたものを使用。郷土史家小島一男によって編まれた『会津女性人物事典』歴史春秋出版、1992年、190頁でも、松川栄亀は会津藩士となっている。ただ、明治政府は武士の帰農帰商を推奨していた。維新後の士族の編成については、落合弘樹『秩禄処分』中公新書、1999年。園田英弘・広田照幸・浜名篤『士族の歴史社会学的研究 武士の近代』名古屋大学出版会、1985年。阿弥陀町については、「幕末会津若松城下郭内絵図（付現代対比）」『会津若松市史一九 会津の史的風景』会津若松市、2006年。

12 小島、190頁。河内山雅郎編『維新長会志譜 後編——会津遊撃隊』河内山雅郎、2001年、51頁。ただし、両方とも出典が記されていない。また、小島によるかしが後年英文で書いた戊辰戦争の記憶の翻訳は、原文に照らすと明らかに間違っている。小島の記述は情報に対する厳密性に欠け、十分信頼できない。それでも、ここにこの記述を紹介したのは、地元に残る言い伝えなどは、郷土史家なればこそ収集できるものだから、勝次郎に関する情報が少ないなか、この記述を黙殺するのは惜しいと考えたからである。ただし、信憑性のほどは保証できないことを前提にして欲しい。

13 小島、191頁。「鬼官兵衛」については、興梠二雄「鬼官兵衛」<https://kumamoto.guide/look/terakoya/045.html>（2019年12月23日アクセス）。「佐川官兵衛」<http://boshin.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/person/110/>（2019年12月23日アクセス）

逃れて京都から会津若松に向かい、その途中「ミヤまで来た」とき、母が出産した¹⁴。「ミヤ」は“as far down as Miya”という英語の表現から、京都からはかなり離れた場所で、かつ、会津若松まで「五〇〇マイル以上の距離」があった¹⁵。東海道五三次の41番目の宿場宮の宿（別名熱田宿。名古屋に近い）であろうか。そこから若松まで500マイル以上の距離はないが、若松賤子が距離を誇張した可能性はあろう。このとき生まれた女兒（かしの妹）が「みや」と名付けられたのは、生まれた場所に因んだものと考えられる。

「ミヤ」から駕籠に乗って会津若松に戻った松川（島田）母子は、1868年6月から9月まで続いた会津戦争に遭遇することになった。かしの記憶によれば、女たちが家から逃れる際、頭上を弾丸が飛んだ。

封建時代に育った私たちの若い母は、勇敢にも家の年配女性に対し、銃弾が誰かに当たるがあっても、負傷した者の面倒を見て、自分の身を危険にさらさないよう警告しました。短剣で負傷者の苦しみを終わらせて、急いで逃げるようにと。彼女の姑は、彼女よりずっと長生きしたのですが、そのときの声音と警告を思い出すたびに震えが来るとよく話していました¹⁶。

この回想から、かしの母がいかに武家の女性らしい戦乱における作法を身に着けていたことがわかる。

9月に会津藩が降伏すると、勝次郎は脱走し、諏訪常吉率いる会津遊撃隊の隊員として箱館戦争に参加した¹⁷。1869年秋、松平容保は赦免、嫡男の容大に家名継承が許され、斗南藩3万石と北海道四郡の支配を許された¹⁸。移住が始まったのは、1870年春からである。1869年初夏箱館戦争での敗北の後、勝次郎は謹慎し、後、同年に新たに設立された若松県の権少典となった¹⁹。山口玲子の調べによれば、勝次郎の実父古川権之助、養父松川栄亀とともに斗南に行ったというが²⁰、勝次郎は斗南には行かなかったのである。そして、勝次郎一家が、一八七一年に岩代国福島県管内高子町の熊坂宇右衛門のもとに出稼ぎに出たという記録が残っている。曾祖母（満七一歳）、妻（満二八歳）、長女（満七歳、かしであろう）、次女（満四歳、みやであろう）を伴ってのことである²¹。会津若松市立会津図書館の成田陽子氏によると、高子町とは、現在の伊達市保原町上保原高子である。すなわち、次節に説明する、福島養蚕業の中心地「信達地方」に位置する。

14 下に記すように、島田みやが一八七一年に満四歳であったことからすると、生まれたのは、一八六七年か。

15 *The Japan Evangelist*, Vol. 2, No. 1 (Oct., 1894), p. 35.

16 *Ibid.*

17 山本博司編「箱館戦争参戦 会津藩遊撃隊名録」『北の幕末維新』第2号（1984年）、6-7頁。河内山編、51-52頁。

18 会津藩の敗戦後の歴史については、星亮一『斗南藩』中央公論新社、二〇一八年を参照。

19 山本編、7頁。ただし、若松県に勤務したのがいつかわからない。1871年にかしを手放した後の可能性もある。

20 山口玲子『とくと我を見たまえ』新潮社、1980年、25頁。

21 『元斗南藩貫属各府県出稼戸籍簿』（北会津郡役所文書45）、1871年、17-18頁。会津若松市立会津図書館所蔵の『元斗南藩貫属各府県出稼戸籍簿』とは、斗南に行かず、会津に残った藩士の戸籍簿で、1871年に作成された。なお、年齢は数え年で記入されているのを本稿では満年齢にした。本資料、および、注10、17、22に挙げた資料、さらには会津若松の地図は、会津若松市立会津図書館の成田陽子氏が筆者の質問に答えて、ご教示くださった。感謝して記す。

勝次郎一家を引き受けた熊坂宇右衛門は、高子村の名主で、二代目宇右衛門（18世紀後半）は台州と号して朱子学及び心学を研究し、三代目、四代目宇右衛門も心学を継いだ。しかし、心学は、明治初年には衰退過程にあったという²²。つまり、勝次郎は、江戸時代に身分を超えて広く受け入れられた、二宮尊徳に代表されるような実践倫理が息づき（衰退過程にあったとはいえ）、養蚕業で活気づく農村に生活の糧を見出そうとしたわけである。特に女たちは蚕糸や真綿の生産の労働力となりえたはずである。養蚕は維新で失職した武士にふさわしい、品位ある経済活動と認識されていたとも言う。

松川勝次郎と高子の熊坂家がどのような関係であったかは不明である。会津藩は斗南に行かない藩士約6400名を会津に残し、その戸籍をつくった。会津を出て出稼ぎ生計となったのは725戸である。この中には松川家だけでなく、山本（川崎）八重（後に新島襄の妻となる）の一家も入っていた。山本家の出稼ぎ先は、羽前国米沢県管内・城下・内藤新一郎方であった。内藤は御螺吹一人扶持四石の低身分だが、八重の夫川崎尚之助に学んだ可能性があるという。出稼ぎ先は何らかの縁をたどって決定されたのであろう²³。

ところが、高子に移って間もなく、家内労働と養蚕業において一番の貢献者と期待されたはずの勝次郎の妻（かしの母）が28歳で死亡した。結果、当時7歳だったかしは、福島を訪れていた「東京の商人」大川甚兵衛にもらわれた²⁴。

2. 貧困と養子縁組

大川甚兵衛は横浜に本店のあった山城屋の番頭（手代とする資料もある）であった。山城屋の主人和助（1836-1872）は、長州の周防国玖珂郡山代荘本郷（和泉）村の医師の息子で、もと野村三千三といった。両親に死別し、一度僧籍に入ったが、後還俗して高杉晋作の騎兵隊に参加し、戊辰戦争で活躍した。諜報の任務をしていたという説もあり、1920年代に「勤王美談野村三千三」という新派の芝居で、乞食に見をやつして佐幕派の動静を探る野村が演じられたこともあるという²⁵。そのことから、敵対する間柄とはいえ、同じ隠密としてかしの父親と野村三千三には京都で接点があり、その縁からかしは大川に託されたという話がある²⁶。しかし、この説はこじつけが過ぎないだろうか。

維新後、野村三千三は山城屋和助と名乗り、かつての同志、山県有朋の後援のもと、陸軍の御用商人となり、陸軍の公金から無担保で融資を受け、横浜南仲通り3丁目に店を出し、生糸貿易にも乗り出した。1871年には東京日本橋の本石町にも出店、商売はごく短期間隆盛を極めたようだ。

山城屋番頭の大川甚兵衛の仕事は、生糸の買付であったと考えられる。現在の福島県北部にあたる信

22 庄司吉之助「世直し大明神菅野八郎」『福島史学研究』復刊第8号（通巻第14号）（1969年）、12-14頁。

23 西澤直子『福沢諭吉とフリーラヴ』慶應義塾大学出版会、2014年、130頁。野口信一監修『詳解会津若松城下絵図』歴史春秋出版、2011年、262頁。

24 “Sketch by the Rev. E. S. Booth,” *The Japan Evangelist*, Vol. 3, No. 4 (1896), p. 229.

25 山城屋和助に関する情報は、伊藤仁太郎『隠れたる事実明治裏面史』大同出版社、1939年、72-119頁。関壮一郎『政界疑獄史』日本書院出版部、1930年、39-42頁。渡辺幾治郎『人物近代日本軍事史』千倉書房、1937年、151-159頁。宮武外骨編『近世自殺者列伝』宮武外骨、1931年、6-7頁。以下も同様。

26 尾崎、18頁、43頁注7。

達地方（現在の阿武隈急行線沿線）は、蚕糸業で古くから知られ、江戸時代に伊達郡で開かれた諏訪市、天王市、掛田市は生糸に特化した定期市であった。中でも天王市の賑わいは大層なもので、毎年6月の大市では、5-7里も遠方の百姓が持ち寄った糸が取引され、大金が動いたという。明治以降、信達地方は、蚕種を全国に出荷するとともに、福島町の間屋は、生糸を買い集め、横浜の貿易商を通じ、海外に輸出した。掛田は生糸の町として国際的に知られるようになったという²⁷。また、明治期の信達地方は、機械製糸が主流となる前の日本の産業構造に適した「改良座繰」という技術に優れ、1881年に、中津（福沢諭吉の出身地）市学校が福島で座繰の技術を習って帰って来た女生徒を教師として雇用したという例もある²⁸。一方で、1873年には二本松製糸会社が初の民間機械製糸工場として設立されている²⁹。松川勝次郎一家が移り住んだ高子は間屋の集まる福島に近く、「生糸の町」掛田からは直線距離で約6キロのところにあった。

大川甚兵衛は山城屋から大きな資金を託されて、生糸の買付を手広く行っていたと想像してみると、一夜、彼が福島で遊興し、座敷に呼んだ遊女3人を一度に落籍して自由の身にし、そのうち行き場のない一人を折から妻と死別したところだったので後妻にしたという逸話も全くの作り話とは思えない³⁰。後年の若松賤子の回想によれば、大川甚兵衛には、確かに教育がなく、実子のない妻がいた³¹。大川の妻となった遊女は「おろく」と言ったと小島一男は書いているが、松川（島田）かしの戸籍には養母の名は「とり」と記されている³²。

福島の遊郭・遊所は奥州街道をはじめとする諸街道の宿場に明治以前から数多く存在した。1879年の調べでは、福島県内には貸座敷264軒、娼妓961人、芸妓193人がいたという³³。娼妓が圧倒的に多いのは、江戸期の宿場の飯盛女、食売女、湯女等が遊女とともに1872年の「娼妓解放令」以降、「娼妓」というカテゴリに一括されたためだろうか。なお、高子に近い遊所としては、飯坂温泉があった。

幕末維新の混乱期、諸国を移動した「志士」たちは、しばしば遊所を訪れ、様々な便宜を得、そこで知り合った女性を妻とすることがめずらしくなかった³⁴。たとえば、伊藤博文の妻梅子はもと芸者であった。こうした事例の背景には、近世においては、性交渉や性売買に対する感覚が現在とかなり異なっていた

27 「伊達地方の養蚕(1)~(13)」<https://www.city.fukushima-date.lg.jp/soshiki/87/1144.html>(2019年12月25日アクセス)。

「養蚕とふくしま」<http://www.city.fukushima.fukushima.jp/bunka-bunkazai/fureai/rekishi/gendai/fureai03-17.html>(2019年12月24日アクセス)。伊達市保原歴史文化資料館編『伊達地方の養蚕業』伊達市保原歴史文化資料館、2011年。

28 西澤直子『福沢諭吉と女性』慶応義塾大学出版会、2011年、73頁。

29 「近代製糸業の先覚者 山田脩」<http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/page/page001100.html>(2019年12月24日アクセス)。

30 この話は、小島、192頁。横浜の生糸の買い付け商人が養蚕地松本の同じ料理屋に必ず泊まり、「芸者を揚げて、飲めや唄えやの大騒ぎを演じ」たことが、松平平三『松平三代の女』風媒社、1994年、62-63頁に載っている。このような行動パターンは、浮き沈みの激しい横浜の生糸貿易商にありがちであったのではないか。

31 しづ子「子供に付て(二)」『女学雑誌』第346号(1893年6月10日)、161-163頁。

32 小島、192頁。尾崎、391頁。

33 武林弘恵「福島県所在の遊郭の沿革と概要」<http://yukakustudy.jp/archives/366>(2019年12月25日アクセス)。

34 「そこで知り合った女性」とは、近代になって「芸娼妓」とひとまとめにされるような女性たち。「芸を売ること」あるいは「給仕や酌取りをすること」と「性を売ること」が必ずしも弁別されない世界で生きる女性たち。京都に於ける例について、辻ミチ子『女たちの幕末京都』中央公論新社、2003年、181-186頁。

ことがあろう。横山百合子によれば、武士にとって吉原行きは、ふと思いついて仲間と楽しむという程度の、倫理的ためらいを伴わない行為であった。都市民衆は、結婚相手が過去に遊女であったとしても、特別の支障とは考えず、遊女たちも貞操観念や純潔規範を内面化し、売春経験をスティグマとするような売春罪悪感を抱いていなかったという³⁵。吉田伸之は、近世における遊女は一時的奉公形態であり、貧農や下層借家人層の「家」に所属する若年の女性が、「事実上の身売りを内容とする下女奉公契約に放出された結果、一時的に取る「地位・状態」であった」とまとめている³⁶。文学者や文化論者に比べ、一般的に歴史学者は江戸期の遊郭・遊所の残酷な局面あるいは、問題を見る傾向があるようだが、その歴史学者たちをしても、現在とは異なる近世の性に対する態度をこのように指摘しているのである³⁷。

こうした背景に大川甚兵衛を据えると、福島での遊興や遊女落籍、そのうちの一人を妻にしたという話が実際あったとしても、当時としてさほど突飛なことではなかったと言える。大川の出自が大いに気になるが、買い付けを任せられ、しかも金の使い道に多大な裁量権を持っていた（遊興や身請けに使った）とすれば、山城屋が信頼を置いた人物であったはずだ。大川が生糸買い付けの過程でどのように松川勝次郎一家と出会ったのかは不明だが、高子の名主で心学の素養がある熊坂宇右エ門の庇護下に松川一家はあったのだから、妻が亡くなり、曾祖母と二人のまだ幼い娘を抱え、困窮する勝次郎と当時羽振りが良いことで知られた大川甚兵衛との間に養子縁組を取り持つ人がいたとしても不自然ではない。遊女を落籍し、自由の身にしたことがあったとすれば、そのような大川の義侠心が見込まれたとも想像できる。父親の勝次郎が介在したのだから——従来の理解では、養子縁組成立の際、勝次郎が居たとは想定されていない——ある程度の信頼を大川に寄せた上で、養女に出したと考えられる。

だとしても、1871年に高子で出稼ぎをし、間もなく妻が亡くなり、娘のかしは同年9月頃には横浜のメアリ・E・キダーの私塾の生徒になった。つまり、かしの養子縁組は切羽詰まった、慌ただしい決断であった。しかも山城屋和助は長州の出で、ほんの少し前まで勝次郎の敵であった。養子縁組は「口減らし」以外の何であったろうか。

近世において、養子縁組が養子契約に仮装した人身売買となるケースについての石井良助の解説によれば、幕府の公事方御定書の下巻第46条には、1733年の決定として、「軽きもの養娘遊女奉公に出し候もの実方より訴出づるとも取上げなし」とある。つまり、軽い身分の者が養女を遊女奉公に出したといって実家が訴え出ても、養子縁組の際、遊女奉公に出さないという証文を交わしていない場合はもちろん、

35 横山百合子「幕末維新时期の社会と性売買の変容」明治維新史学会編『明治維新と女性』有志社、2015年、159-163頁。

36 佐賀朝・吉田伸之編『遊郭社会（1）』吉川弘文館、2013年、11頁。

37 佐賀朝と吉田伸之は、『遊郭社会（1）』に掲げた「刊行の辞」のなかで、「この列島の歴史は、性売買の問題をその基底部に常に抱え続けた。中世の遊女が職人の一種で「無縁性」を体現する自由な存在であったとして美化したり、近世の遊郭を、浮世絵のきらびやかに描かれるイメージどおりに、そこに蠢く権力者や有産者を主役とする遊客の視点で、高度で洗練された美や文化の発信源などとしてまばら描くような傾向が、今なお歴史研究の世界においてすら横行している」と書いている。このような遊郭社会への批判的態度を持つ歴史学者でも、近世の性の扱いが現代と異なるという見解においては、田中優子のような文学者と一致している。たとえば、田中優子『芸者と遊び』学研新書、2007年、187頁。なお前掲松平には、尾張徳川家の家臣で5000石取りの松平甚之進が維新で落ちぶれ、生活に窮して4人の娘を次々と売った話が出て来る。そのうち三人は紆余曲折の後、身請けされ、正妻の座についている（松平、26-29、38-39、42-43、47-68頁）。

交わしている場合でも、訴えを取り上げることはない、というのである。身分の低い者が、いわれなく他人の子を養うはずもないのだから、そのような者に養女に出すときには、将来遊女になるくらいのごとは当然覚悟すべきだという論理だという。1872年の娼妓解放令は、仮装の人身売買的奉公契約を禁止したものの、芸娼妓等の便宜から生じた養子縁組の有効性について、その後も長く裁判で争われた³⁸。江戸時代、武士の養子縁組については別に定めがあったというが³⁹、明治初年の敗残下級武士は、もはや庶民と見なして差し支えなからう。要するに、松川勝次郎が切羽詰まった状況で娘を「東京の商人」大川甚兵衛の養女にするということは、こうしたリスクが織り込まれてはいたはずであり、かしは、遊郭・遊所の世界と隣り合わせの境遇にあったと言っても過言ではなからう。その意味で、かしより8歳若い樋口一葉が貧困のなかで身近に見た遊郭・遊所の世界は、かしにとっても無縁ではなかった。

かしと同じように会津藩出身で、敗戦の辛苦をなめた同世代の女性に1860年生まれの子川咲（後の大山捨松）がいる。子川家は、知行1000石の家老の家であったが、斗南に移住し、生活に窮した。そのとき、咲は、推定だが、函館の沢辺琢磨（坂本龍馬の親類でロシア正教宣教師ニコライの一番弟子）のもとに預けられ、その紹介で一時フランス人宅に養われたという。そして、1871年——奇しくも、かしが養女に出された年——に兄の計らいで開拓使の女子留学生募集に応じ、長期アメリカ留学に旅立った。咲の母は、いったん捨てて帰りを待つという意味で、咲に捨松という新しい名を与えた⁴⁰。家老の子川家は、急場を凌ぐために咲を養女に出してはいない。彼女の命運に対する支配権まで放棄しなかった。一度捨てても、待ったのである。ここに同じ会津の武家出身といっても、家老だった子川家と下級藩士の松川家の違いが認められよう⁴¹。

一方、大川甚兵衛がかしを養女としたのは、なぜだろうか。松川勝次郎の困窮に対する義侠心とも想像できるが、その一方で、山城屋和助が海外との直接取引を望んでいたことを考えると⁴²、大川は、番頭として、頭の良さそうなかしに英語を学ばせれば、商売の役に立つと踏んだのかもしれない。南仲通り3丁目の山城屋和助の店は、生糸相場、取引等の情報収集にもあたっていただろうから、居留地の動静にも通じていたはずだ。クララ・ヘボン（ヘボンの妻）主宰のヘボン塾は、1863年から断続的に開かれて、女兒も教えていた。1870年8月にヘボン夫人が蒸気船の事故で亡くなった長老派宣教師コーズ夫妻の遺児の世話で忙しくなると、オランダ改革派の宣教師メアリ・E・キダーが生徒を引き取り、ヘボンの施療所を借りて教え始め、1871年9月第2週からは女兒だけを教える塾として2年目を開始した⁴³。こうした情報は大川のみならず、横浜の日本人商人に共有されていたに違いない。養蚕業は当時の最先端技術を要したから、養蚕地は教育熱心で、民間で早くから立派な小学校を作ったことが指摘されている⁴⁴。

38 石井良助『江戸の遊女』明石書店、2013年、108-111頁。

39 同上、113頁。

40 久野明子『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松』中央公論社、1988年、27-58頁。

41 なお、すでに注37で紹介したように尾張藩5000石の直参であっても、親が維新に適應できず、無策で、娘を売った例もある。子川捨松の場合は、家督を継いでいた兄に適應力、才覚があったと言うべきだろう。

42 伊藤、前掲書ではこの見解を取っている。1870年から71年の普仏戦争のあおりで、絹相場が暴落し、山城屋和助は大損害を被った。山城屋は1871年末から半年間、アメリカとフランスに行き、現地商人との直接取引を目論んだという（伊藤および「山城屋和助」『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社、一九九四年を参照）。

43 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東京大学出版会、1992年、252-253頁。

同じように、生糸貿易商は、外国語の習得の必要性を痛いほど知り、養女に英語を習わしてみるといった斬新な発想を持ち得たのではないか。

3. キダーとの縁

かくして、1871年に生糸と共に横浜に至った大川かしは、メアリ・E・キダーの女塾に入れられた。キダーは後に、かしは「入学した時、わずか8才（数え年——筆者注）でした」と書いている。1871年の「課者報告」には、キダーの生徒11名についての記述があり、「馬車屋常盤ヤ 於加志 八才位」と記されている⁴⁵。於加志は大川かしと推定できる。また、奥野昌綱によれば、彼がヘボンの聖書翻訳助手として1871年春に「コック部屋の二階、六畳二間の一室」を借りてからしばらくして、残る一室に「嶋田嘉之子」を預かるようになったという⁴⁶。これは大川かしと見て間違いない。満7歳当時のかしは、「怠けがちだったため、常に彼女に付き添って一緒に勉強をしていた使用人にずいぶんと後押しされていた」とE・S・ブースは書き留めている⁴⁷。

これらの情報を、山城屋和助が1871年に東京に移住し、本石町に店を出したという情報⁴⁸と考えあわせて想像してみたい。横浜に至った当初、キダーの元に学びに行ったかしは、使用人にかしずかれていたのではなく、使用人とほとんど同じ立場の居候として、英語を学びにやらされた。かしが男性の使用人と一っしょに学んだとすれば、1871年9月になって、キダーが生徒を女兒だけに限ったことと矛盾するが。頭初住んでいたのは、「馬車屋 常盤ヤ」であり、これは山城屋和助の店の呼び名であろう。そして、間もなく、ヘボン宅の使用人部屋の二階に住むようになった。ヘボン夫妻は1871年11月から1873年11月の間、ほとんど横浜にいなかったもので、誰がかしの生活の面倒をみたのかはわからない。当時キダーは基本的にS・R・ブラウン宅に住んでいたもので、多くの独身女性宣教師が自宅を持った場合そうしたように、子供を引き取って一緒に住むことはできなかった。ただ、宣教師は、不在時の家に別の宣教師を住まわせることが普通だったので、ヘボン宅は同僚の誰かが利用していたはずである。そして、ヘボンの家の使用人がかしの世話をした可能性がある。だとすると「一緒に勉強していた使用人」はヘボンの家の使用人だったかもしれない。そう考えると、使用人が男だったとしても、キダーの学校に出ることも可能だったと推定できる。一方で、1871年に山城屋和助が東京に移ったとすれば、かしを連れ帰った大川甚兵衛が横浜に住み続けたかどうか、疑問が残る。東京に移った大川が、かしをヘボン宅使用人部屋二階に住ませ、下宿料を支払った可能性がある。

1871年は、かしにとって急激な変化と絶望的な孤独が襲った年であったろう。高子で母が死に、養女

44 橋本淳治・板倉聖宣「明治初期の洋風小学校の建設とその思想史的・経済史的背景」藤田英典・黒崎勲他編『教育史像の再構築』世織書房、1997年、261-312頁。

45 キダー書簡（1882年1月19日付け）フェリス女学院資料室編『キダー公式書簡集』フェリス女学院、2007年、179頁。井上平三郎編「横浜海岸教会初期記録」『あゆみ』第9号（1982年）、1頁。

46 黒田惟信編『奥野昌綱先生略伝並歌集』。鈴木美奈子「若松賤子の思想とミッション・スクールの教育」『フェリス女学院大学紀要』第7号（1977年3月）、2-3頁に引用されたものを参照。

47 尾崎、24頁に訳出されたものを使用。

48 関、39頁。

に出され、横浜で見ず知らずの家に預けられた。しかも、それまで全く知らない英語の授業である。当初、学ぶ気も起こらず、一緒に学ぶ使用人の助けが必要だったのも当然だろう。しかし、その後、横浜居留地とその近辺での生活と学習を通じ、彼女はある程度の英語能力——少なくとも聞き取りの力——を身につけたと考えられる。1875年12月にメアリ・E・ミラー（キダー）が、かしは「英語を上手に話し、お茶についての作文を書いた」と伝道局に報告している⁴⁹。かしがミラー夫人の元に戻ったのは、1874年夏だが、満7歳から8歳にかけての言語環境のおかげで、ブランクを易々と乗り越えたのだろう。

ところで、1872年、渡航先のパリで豪遊したことから、山城屋和助の総額65万円にも上る陸軍省からの公金貸し付けが発覚した。これは疑獄事件に発展し、借りた金の返済の目途がたたないなか、その年末、和助は手紙や関係書類を処分したうえで、陸軍省を訪ね、その一室で切腹し、店は倒産した。一連の事件は、当然大川甚兵衛の経済状況や将来計画に影響を与えた。そのため、この年、かしはキダーの塾をやめて東京に移り、大川甚兵衛の妻と暮らし始めたと考えられる。山城屋の倒産で、かしに英語を学ばせて商売の助けにしようとしていたとすれば、その計画は頓挫ということになっただろう。1872年秋からキダーの学校が居留地から伊勢山の神奈川県官舎に移ったことも影響したかもしれない。伊勢山は居留地からは遠く、日本人の官庁街であった。

1885年にかしが大川家との養子縁組を解消したとき、養母との住所は、下谷区下谷稲荷町九番地であったので⁵⁰、1872年から1874年夏まで大川かしが上野の下谷稲荷の近所に住んだ可能性がある。後年の若松賤子の「九才位の時」——満年齢では八歳頃——に関する回想によれば、その家には実の娘もあり（甚兵衛が先妻との間に得た子か？）、かしは近所の学校に通っていた。学校友達に縮緬細工の香箱をもらい、端布欲しさに香箱から布をはがしてしまった。それを養母に咎められ、ヒモで縛って折檻された。

折りの悪るいことには、此日、私は養はれて居た家の実の娘に何かしたとか、いつたとかで、御機嫌を損こねた時故、私ども兩人を育てて居た婦人（母に非ず、子を持ちしことなき人）が、早速私のいたづらを見つけ、義理ある姉と口論つた上句の癩癩と一途に思い僻め升た。……子供心の当惑と口惜しさは、今に骨髓に浸み徹つて忘れられません。さりとて此婦人は決して乱暴な方でもなく、私には寧ろ深切な人でしたから、此時の処置は、全く子供を躰ける義務として得意に致したことでした。……幼な心の可愛らしひとおもへば思へぬことのない嗜好に、同情を持つことが出来なかつたのでした。一口にいへば、思ひ遣りがないので、思ひ遣ることを知らなかつたのでした⁵¹。（強調は原文通り）

東京の養家における、何とも窮屈な暮らし、養母との折り合いの悪さが感じ取れる回想である。だが、この回想からは、経済的困窮は読み取れない。山城屋倒産後も、大川甚兵衛にはそれなりの甲斐性があったということか。だとすれば、かしにとっては幸運なことであった。

49 ミラー書簡（1875年12月28日付け）フェリス女学院資料室編、137頁。

50 フェリス女学院資料室所蔵のかしの戸籍による。尾崎、391頁を参照。

51 しづ子「子供に付て（二）」、一六二-三頁。

大川かしが、1874年夏にミラー夫人（キダー）の元に呼び戻された経緯はよく分かっていない。1873年7月に長老派新任宣教師ローゼイ・ミラーと結婚したキダーは、1874年年頭には山手居留地の四部屋の新築バンガロー住宅に落ち着いた⁵²。つまり、少人数の日本人の子供を預かることのできる環境ができた。

1874年3月の手紙には「コウ」（岡田こう）の話が書いてある。コウの父親は士族であったが、非常に貧しくなり、1873年の春、横浜に住むことができなくなり、江戸に行くことになった。江戸の暮らしは横浜より安上がりであった。コウは学校を辞めたくなかったため、キダーは、「少し教え、それで下宿料を払えるようどこか住むところを見つけようとし」たが、見つけれなかった。「結局、親切な日本の紳士が夏休み前まで家を提供」してくれたが、その後コウは江戸に行き、戻って来なかった。1874年になって、あるアメリカ人のクリスチャンの紳士から、貧しくて困っているミラー夫人の生徒の一人に、午後縫い物を手伝うという条件で住まいを提供したいという申し出があった。ミラー夫人はコウのことを思い出し、江戸の住所を何週間もかけて見つけ（コウが横浜で住んでいた場所の近所の人から教えてもらった）、どのような条件で来ることが出来るかを説明した手紙をコウに送った。すると、すぐにコウは父親といっしょに横浜に来て、申し出を喜んで受け入れ、学校に戻った。コウは当時16歳ほどであった⁵³。

この例から分かるように、ミラー夫人は、各生徒の必要にきめ細かく応ずべく、様々な工夫・手立てを案出する人であった。学校に来られなくなった少女たちのことも気にかけて。彼女は何らかの労働を提供し、生徒が自活する体裁を取ることを重視していた。1875年2月、山手の寄宿舎を含む校舎完成の前に、ミラー夫人は上述のこう、奥野昌綱の娘ひさ、かし、原田りょう（1879年ころよりキダーに師事。後に東京女子師範学校保姆練習科に入学し、幼児教育に従事）の4人を助手として雇用し、月5ドル支払い、3ドルを授業料と寄宿代とし、2ドルを自分たちで使うという計画をたてた⁵⁴。

こうした流れを考えると、1872年に大川かしが去った後、キダーはずっと彼女のことを気にかけており、1874年に寄宿学校が視野に入ってきたとき、夏をいっしょに過ごそうと提案したのではないか。そして、かしがそのままミラー夫妻の新築バンガローに寄留したのは、大川家もかしもそれを望んだということである。大川家ではかしはあまり役に立たなかったということか。

4. フェリス・セミナリーで養われたロマンティシズム

1875年6月に寄宿学校に入り、1889年7月に巖本善治と結婚（冒頭を参照）するまでの14年間、かしがどのように過ごし、成長したか、現時点でわかっていることの一部を別稿に書いた⁵⁵。その中から、かしにとって重要だったと思われる経済問題と養家との関係だけ紹介しよう。彼女は当初キダーが校費収入から支払った助手としての給与で支えられ、1877年に海岸教会で受洗すると、その後は、ニューヨーク州スケネクタディの第一改革派教会の日曜学校の「特別目的」に採用され、支援を受けるようになった。

52 ミラー書簡（1874年1月22日付け）フェリス女学院資料室編、90頁。

53 ミラー書簡（1874年3月7日付け）フェリス女学院資料室編、93-94頁。

54 ミラー書簡（1875年2月10日付け）フェリス女学院資料室編、115-116頁。

55 2020年に公刊されるはずの『フェリス女学院150年史』の1章から3章を筆者は執筆し、その中で若松賤子に関する情報を提供した。

た⁵⁶。つまり、彼女は給費生であった。教員に採用された当初の給与はわからないが、1887年にはニューヨーク市のマディソン街改革派教会がかしをこの教会の「宣教師」に採用、年俸360ドル（月俸30ドル。40円くらいか）を支払う決議をしている。当時アメリカ人女性宣教師の年俸の相場はおよそ600ドルであったから、それよりはずっと少ないが、当時の日本人女性としては高額である⁵⁷。

学校の休暇中に東京の養父母の家にいよいよ帰ることもあったが⁵⁸、1885年までには大川甚兵衛が死去したと見られ、1885年、養母大川とりと離縁、北海道から麻布霞町8番地に転入した実父松川勝次郎の戸籍に復帰し、島田（実父松川の隠密時代の偽名）かしを名乗るようになった⁵⁹。未亡人の大川とりは教員として自立するかしに経済的支援を当然期待しただろうから、この離縁は金銭的弁済なしには成立しなかっただろう。かしは自分で支払ったのではないか。再婚し、1875年には後妻けいとの間に一が誕生していた実父松川勝次郎とも疎遠だったはずだから⁶⁰、実母との思い出のある「島田」に執着したのではないか。松川にしろ大川にしろ、かしにとっては自分が属する家とは言えず、フィクションである島田姓を名乗ったのは、彼女の天涯孤独な孤児的状况を示唆する⁶¹。彼女は、フェリス・セミナリー以外「家庭というものを知らず」、ミラー夫人を「自分の母親だと思い……他のだれにも言わないことを打ち明け」ていた⁶²。

かしがフェリスの教育を通じ、英語と和漢語の両方の能力をつけ、教員、翻訳者、文筆家としての訓練を受けたこと、特に和漢語の教育（毎日午後配置されていた）も受けたことの重要性は、いくら強調しても良い。これこそ、アメリカで教育を受けた山川捨松や津田梅子と大川/島田かしの違いだと筆者は考えるが、ここでは、宣教師といっしょに住む寄宿学校において、生徒の将来像として「クリスチャ

56 *Fourth Annual Report of the Woman's Board of Foreign Missions (WBFM) of the Reformed Church in America (RCA) (1878)*, p. 16. なお、かしの受洗が1877年5月27日であることは、「海岸教会人名簿」（慶應元年～明治25年）、横浜海岸教会所属資料目録、No. 2, 1-1、横浜開港資料館資料室所蔵で確認されたことを、尾崎るみ氏よりご教示いただいた。感謝して記す。

57 *Thirteenth Annual Report of the WBFM (1887)*, p. 46. 1883年の数字だが、津田梅子がメソジストの海岸女学校で毎日午後1時から4時まで教えたときには、月20円（15ドル）であった。女性宣教師は月50ドル貰っていると梅子の手紙にある（Yoshiko Furuki, Mary Althaus, Yasuko Hirata, et.al., eds. *The Attic Letters* (New York and Tokyo: Weatherhill, 1991), pp. 70, 90.

58 養家に帰ることもあったことについては、*The Mission Monthly*, Vol. 3, No. 1 (Apr. 15, 1880), p. 7. ミラー夫人に宛てたと考えられる手紙に、冬休みに東京に帰るかもしれないとかしは書き、「私は努力して両親を安心させ、警戒心を解かないといけない」とある。

59 尾崎、60頁。島田かしの戸籍には、養母大川とりと離縁とあり、大川甚兵衛の名はない。

60 勝次郎の後妻については、尾崎、60、390頁。

61 同じ境遇の妹みやにも島田姓を名乗らせ、フェリス・セミナリーに学ばせた。みやは、1887年の「布恵利須英和女学校一覧」に付属する名簿では、予科2年生に在籍し、出身地は東京になっている（フェリス女学院150年史編纂委員会編『近代女子教育 新学制までの軌跡』フェリス女学院、2012年、33頁。1888年9月の「日本横浜基督一致海岸教会会員名簿」（横浜開港資料館資料室所蔵）では、かしは「松川勝次郎長女」、みやは「松川氏二女」で、出身地は共に「福島県若松阿弥陀町」とある。本資料のコピーは、尾崎るみ氏に頂いた。感謝して記す。みやが、1871年から1887年までどのように生きていたかは不明。なお、みやの墓は染井墓地の巖本家の墓域内にあり（筆者が現地を確認）、かしの死後も巖本家が独身のみやの面倒をみたことが想像される。

62 大川かし書簡（1882年10月付け）*In Memory of Mrs. Kashi Iwamoto* (1896; rpt. 龍溪書舎、1981)、161頁。ミラー書簡（1882年1月19日付け）フェリス女学院資料室編、178-179頁。

ン・ホーム」を担う主婦というのが、少なくともかしの生きた時代の社会構造の中で、大きな位置を占めたという観点から、かしの学校生活を考えてみたい。

女子教育を行う宣教師——そのほとんどは女性宣教師であった——にとって、生徒の結婚は大きな関心事であった。というのは、手塩にかけて教育し、キリスト教の受容まで導いたとしても、15歳位になって親が結婚のために退学させることはよくあった。親が決める縁談の相手がクリスチャンであることは稀である。そもそも女子ミッション・スクールは、クリスチャン男性に相応しいクリスチャンの女性を輩出することを目的の一つとしていた。クリスチャン同志の結婚を実現させ、「クリスチャン・ホーム」を形成し、キリスト教の発信基地、かつ、次世代クリスチャンの揺籃とするのが、少なくとも北米発のプロテスタント・キリスト教の伝道事業の定石の一つであった。親が決めた結婚のための中途退学は、こうした宣教師側の目論見を頓挫させる。

アメリカでは1830年代までに「ロマンティック・ラヴ・イデオロギー」が少なくとも白人中流階級の結婚をめぐる流儀として定着した。男女はプラトニックなレベルでの交際を通じ、互いに対する愛を深めた結果、結婚に至り、初めて性的な関係を持ち、子供を得、「ホーム」を築こうと努力する。その際、女性のクリスチャンとしての自己犠牲を旨とした徳性が「ホーム」を「聖域」となし、世俗にまみれる夫を「浄化」し、清らかな影響を子供たちにもたらす⁶³。

1834年生まれのメアリ・E・キダーは、このイデオロギーを内面化して育ち、1873年7月に39歳でついに意中の男性ローゼイ・ミラーと結婚した。彼女は自分の学校の全員を結婚式に招待し、「キリスト教の結婚式を是非見せ」、「キリスト教徒が厳粛な式に臨む精神を日本の女性に教え」ようとした。「結婚の絆は神聖であり、命のかぎり続くべきものであることを学ぶ」機会としようとしたのである⁶⁴。キダーはそこまで意識しなかったかもしれないが、この結婚の発想を少女達が受け入れれば、親が持つて来る縁談に彼女たち自身が抵抗することになる。実際、1875年、キダーの愛弟子岡田こうは、親が持つてきた旧大家の跡取りで洋行帰りのエリートとの縁談を拒絶したこともあった。キダーはそれを正しい判断として、こうを勇気づけた⁶⁵。

大川かしは、1872年に東京に移っており、この式には出なかったはずだが、1874年の夏、まだ新婚気分のミラー夫妻と生活を共にし、1875年から79年までは、寄宿学校でミラー夫妻と共に住んだ。影響は甚大だったろう。ミラー夫妻が去った後、1881年からはE・S・ブース夫妻が学校に住み込んだ。彼等もまた1879年に結婚したばかりの若い夫婦であった⁶⁶。

E・S・ブースは、1882年年頭にフェリス・セミナリーの「手刷り規則書」500部を出し、その冒頭の緒言で、「女子教育の利益」を述べた。まず、女子教育は「室家の和楽」を増進させるとある。つまり、教育のある女性は、男性の好伴侶となり、「一家の事務」の相談にも応じることができるので、室家の

63 以上の議論について、より詳しくは（一九世紀アメリカで「ホーム」が教会に次ぐキリスト教の砦となっていたことなど）、小檜山、2016年、および、小檜山、2019年を参照して欲しい。

64 小檜山、1992年、260-261頁。

65 同上、261頁。

66 Clipping from *Rutgers Alumni Monthly* (Dec., 1922) in the File of Eugene Samuel Booth in the RCA archives, Sage Library, New Brunswick Theological Seminary.

幸福はより大きくなるというのだ。次に、女子教育は、「人世ヲ愛ス可ク楽ム可キノ境為ス」とある。これはわかりにくいだが、女子教育をすると、女性の「心力」に磨きがかかり、「偉容」が正しくなり、「清操」が高まるので——つまり身持ちが良くなるということだろう——社会が「清潔高風」になり、男女の出会いに高尚な目的が生まれ、その出会いを楽しむことができるということだと考えられる。第三に女子教育は「国の福」だとある。つまり、将来の国の諸事を担う子女に薫陶を与えるのは母なのだから、母がまず国民としての義務や責任を知ることが大切であり、女子教育はその母を育てる国家的事業だというわけである。これはアメリカの建国期に流通した「共和国の母」論の系論である。フェリス・セミナリーはこれらの目的を助け、導くために設立され、西洋文化の神髄を教え、同時に日本と中国の文学を「至当ノ人ヲ以テ」教えるのであった⁶⁷。つまり、ブースによって初めて明文化されたフェリス・セミナリーの教育の目的は、「ロマンティック・ラヴ・イデオロギー」が実現できるような、「心力」、「偉容」、「清操」を備えた女性を輩出することだったと読める。現代的視点からすると、いかにも凡庸な目的に見えるが、明治初期から中期にかけての、その革新性を指摘すべきであろう。当時の日本で、親や夫の指図から自立した「心力」、「偉容」、「清操」を持つ——つまり自分で判断する娘の輩出を教育目標とすることは一般的ではなかったはずである。ブース夫妻の下で、かしはこのような目的を意識しつつ、第一回の卒業生となり、教員となったのである。

女子ミッション・スクールでは、1880年代になると、年長の生徒たちの結婚を意識して、学校の関係者や宣教師の眼鏡に適った適齢期のクリスチャン男性を招いて「交際会」を催し、会話や音楽や素人劇を楽しむといったことが行われたようだ。フェリス・セミナリーでも、1886年と1887年に交際会が開かれた。かしは、1887年に『リア王』第1幕の朗読劇に出演し、かしの未来の夫巖本善治は、それが秀逸な出来だったと『女学雑誌』報告した⁶⁸。

また、フェリス・セミナリーではアメリカ流のコートシップを目撃する機会があったと考えられる。たとえば、1887年2月19日にはH・L・ウィンが横浜在住の商人ジェームス・ウォルタと結婚した⁶⁹。同じ年の10月には、アナ・バラがアメリカ南長老派宣教師R・E・マカルピンと結婚している⁷⁰。独身女性宣教師の結婚は、学校の教員計画を乱すので、必ずしも歓迎されるものではなかったが、それは生徒の前で表現されなかっただろう。むしろ生徒たちは、結婚に至る過程を垣間見（婚約者が訪ねて来るなど）、結婚の決断が尊重され、暖かく送り出される様子を見たはずである。さらに、より身近な、日本人クリスチャン同士の婚約や結婚の事例も学内にあった。1877年にかしといっしょに洗礼を受けた山内季野は、3年ほどの婚約期間を経て、1882年に植村正久と結婚した。後輩の坂従やすは、1883年4月に札幌農学校のクリスチャン宮部金吾と婚約し、1889年9月に宮部が留学から帰り、結婚するまでの長い婚約期間の多くをフェリス・セミナリーで過ごした⁷¹。

67 フェリス女学院150年史編纂委員会編、2012年、9-13頁。

68 小檜山、2016年、42-43頁。

69 *The Mission Gleaner*, Vol. 4, No. 3 (Mar. and Apr., 1887), p. 9.

70 フェリス女学院150年史編纂委員会編『RCA伝道局報告書に見るフェリス』フェリス女学院、2015年、52頁。

71 佐波巨編『植村正久と其の時代』第1巻、教文館、1837年、700頁。宮部金吾博士記念出版刊行会編『宮部金吾』宮部金吾博士記念出版刊行会、1953年、330-331頁。

このような寄宿学校の雰囲気にも増して大川＝島田かしの「ロマンティック・ラヴ」の理想を刻印したのは、フェリス・セミナリーに備えられ、また、かしにクリスマス等の機会に与えられたイギリスやアメリカの小説（英文）であった⁷²。それらは、当時の宣教師やアメリカのキリスト教界が良いと認めるメッセージ、教訓が含まれるものだったはずである。

ミラー夫人（キダー）がフェリスから離れ、間もなく日曜学校での使用を目途に『喜の音』を編集、発行する仕事を引き受けたことに表れているように、19世紀後半、「文書伝道」はプロテスタント・キリスト教伝道の重要な一分野となりつつあった。実際、20世紀初頭に超教派で活動し始めた海外伝道に関わる女性たちは、「良質な」読み物を提供すべく、1916年には、「女性と子どものためのキリスト教出版物教派協力委員会」を結成し、いくつかの伝道地で現地語でのキリスト教雑誌の出版を援助した⁷³。かしは、1886年10月の『女学雑誌』に、病氣療養中の娘に読ませるのに適した小説として、ジョージ・エリオット、ウォルタ・スコット、ダイナ・マリア・マロック (Dinah Maria Mulock, 1826-1887)、オルコット、エリザベス・ペyson・プレントイス (Elizabeth Payson Prentiss, 1818-1878)、エリザベス・ウェザレル (Elizategh Witherell, 1819-1885)、ウォルタ・ベサント (Walter Besant, 1836-1901。1882年まで James Rice との共著が多い)、アン・イザベラ・サッカレー (Ann Isabella Thackeray, 1837-1919。ウィリアム・サッカレーの娘)、ディキンズ、ブルワ・リットン (Sir Edward George Bulwer-Lytton, 1803-1873)、ウィリアム・ブラック (William Black, 1841-1898)、『小さな古典』(全6巻)、雑誌『セント・ニコルス』を挙げた⁷⁴。現在ほとんど知られていない作家のみ、フルネームを記した。

これらの作家、および、「若松しづ」が挙げたそれぞれの作品をすべて解説する煩をここでは省略するが、エリザベス・ウィザレルことスーザン・ウォーナは全体の傾向を代表するだろう。彼女はアメリカの作家で、家計を立て直すために書き始め、宗教的小説・児童文学作品、神学的著作を残した。最初の著作『広い、広い世界』(1850年)は、100万部以上売れた、アメリカの「家庭小説」の代表格である。家庭小説とは、19世紀中葉に盛んに世に送り出された女性による、女性のための、女性についてのフィクションで、若い中流階級の白人女性の日々の家庭生活を主に描き、彼女たちが大人になる過程で参照

72 たとえば、1879年12月頃ミラー夫人宛てに書かれた手紙には、クリスマスにミラー夫人がかしに日曜学校で教えるのに役に立つような本を贈ったことが書かれている (*The Mission Monthly*, Vol. 3, No. 1 (Apr. 15, 1880), p. 7)。

また、かしが結婚して去った後のことだが、ブース校長は、1891年に、教材と図書を充実させる必要を伝道局に対し主張している (Letter from E. S. Booth to Henry N. Cobb (June 29, 1891))。充実させるということは、それ以前に図書のコレクションがあったということだろう。

73 小檜山ルイ『帝国の福音』東京大学出版会、2019年、205、231頁。

74 若松しづ「一七の答」『女学雑誌』第39号(1886年10月25日)、168頁。Dinah Maria Mulock(1826-1887)は、イギリスの小説家、詩人で、イギリスの中流の生活を描いた、勤勉な男の成功物語、*John Halifax, Gentleman*(1856)が最も有名 (Sarah Brown, "Dinah Craik," *The Literary Encyclopedia*(2004) <https://www.litencyc.com/php/speople.php?rec=true&UID=1057> (2019年12月31日アクセス))。Elizabeth Prentissはアメリカの作家で、宗教小説 *Stepping Heavenward*(1869) がもっとも有名。『小さな古典』は、おそらく、Rossiter Johnson, ed., *Little Classics in 12 vols.*(Boston: J. R. Osgood and Co., 1875)の最初の六巻ではないか。各巻のテーマは、1. Exile, 2. Intellect, 3. Tragedy, 4. Life, 5. Laughter, 6. Love。一部を <https://archive.org/details/littleclassics06johngoog/page/n6> (2019年12月31日アクセス) 等で読むことができる。表題の Little は本のサイズが小さく、安価で、短編を集めたことから名付けられたらしい (本の宣伝用頁より)。子供向きということではない。

すべき人生の教訓を与えるものである。その教訓は当時のプロテスタント・キリスト教の価値観に基づいており、敬虔で、純潔で、家庭的で、従順という当時の女性に関する理想像——「真の女性らしさの崇拜」と呼ばれたもの——を提示した⁷⁵。ウォーナの『広い、広い世界』もそうだが、ヒロインは孤児であることが多かった。かしがフェリス・セミナリーで読み得たこれらの本に熱中したのは、自分の境遇と重ね合わせることができたからではないか。

さらに、1890年4月に若松しづ子は、「閨秀小説家問答」に答え、自分が小説を読み始めたのは、15歳の位、「英語の独り読みがカスカス出来て来た」頃だとし、親しんだ作家として、ディケンズ、エドワード・P・ロー (Edward Payson Roe, 1838-1888)、リットン、スコット、ジョージ・エリオット、ストー夫人、オルコット、ホーソン、ダイナ・マリア・マロック (上述)、ユーゴ、シャーロット・ブロンテを挙げた⁷⁶。1886年のリストと比較すると、重なる作家も多い一方で、ウィザレル (ウォーナ) は落ち、新たにストー夫人、ホーソン、ユーゴ、シャーロット・ブロンテといった、現代でも評価される作家が加わっている。

ウィザレルを代表とする家庭小説は、「ロマンティック」、あるいは、「感傷的」とされ、批判されることが多かった。有名な話だが、1855年ホーソンは、「アメリカは今執筆する女たちという忌々しい (d--edと伏せ字になっている) 暴徒に完全に席卷されています。公衆が彼女たちのゴミに占領されている間は、私に成功の見込みはありません」と出版社に書き送った⁷⁷。近年になって、ホーソンが馬鹿にしつつ嫉妬した女性作家は、研究対象として注目を集め、一部は再評価されているが、一時期は文学的価値の低い作品群として全く顧みられなかった。そういう意味で、1890年の若松しづ子のリストは、1886年からの4年間で、彼女が文学的により洗練されたことを示す。たとえば、若松がホーソンの作品のどれを読んだのかは不明だが、それらの多くは、単純な教訓文学の枠組みに収まるものではない。かしが、1885年に「時習会」をフェリス・セミナリー内に結成し、雑誌を発行して、会員の作品を発表し、文学を奨励したことはよく知られている。それは巖本善治が編集する『女学雑誌』での若松賤子としての文章の発表につながっていった。結果、文学的人脈も広がり、彼女の読書の範囲もまた広がったであろう。1889年に結婚し、明治女学校に移ると、夫の周囲に集まる文学的素養の高い青年男女とも交流するようになった。それは、かしが自らに課した道徳的制約を打ち砕くような経験であったことが、読書リストに表れている⁷⁸。もし、若松賤子が早世しなかったら、彼女の文学はどうなっていただろうか。

だが、だからこそ、「閨秀小説家問答」での若松賤子は注意深い。読んでも差し支えないと女学生に勧められるのは、スコット、マロック、ストウ夫人くらいで、その他の大家の作品の多くは、若年者に

75 家庭小説について、Lisa M. Logan, "Domestic Fiction," <https://www.encyclopedia.com/arts/culture-magazines/domestic-fiction> (2020年1月1日アクセス) を参照。スーザン・ウォーナーの『広い、広い世界』についても簡便な解説がある。また、佐藤宏子『アメリカの家庭小説』研究社出版、一九八七年を参照。

76 若松しづ子「閨秀小説家問答」『女学雑誌』第207号 (1890年4月5日)、15頁。ローは長老派牧師の小説家で、宗教的、道徳的目的で書かれた小説は、アメリカ社会にあったピューリタンの小説に対する禁忌を和らげたという (Mary A. Roe, "Roe, Edward Payson," *Encyclopedia Britannica* (1911) https://en.wikisource.org/wiki/1911_Encyclopædia_Britannica/Roe,_Edward_Payson (2019年12月31日アクセス))。

77 John T. Frederick, "Hawthorne's Scribbling Women," *The New England Quarterly*, Vol. 48, No. 2 (Jun., 1975), pp. 231-240.

は「有害無効」としている。若松は、「正義、高潔」が世の中で勝利するのを助けるために、文学に嗜好と心得のある女性が小説を書くことを肯定し、小説の道徳的感化力を使って日本社会を浄化することを執筆活動の目標とすることを明確に表明した⁷⁹。おそらく、文学的人脈が広がる中で、若松の宣教師的読書趣味を批判する人が居て、若松は意識的に読書範囲を広げたのだろう。その上で、なお小説の目的を道徳的感化に限定する自らの立場を強調したのである。

いずれにせよ、かしは、フェリス・セミナーで家庭小説に熱中し、そこに描かれる孤児のヒロインが様々な困難に遭遇しながら、道徳的優越性、あるいは、「真の女性らしさ」を獲得し、最終的に理想の男性と結婚し、幸福になるというシンデレラ物語に深く印象付けられていたことは確かである。後年、若松賤子を著名にした『小公子』をエロル夫人の物語として読めば、身寄りのないアメリカの女性がその清らかな道徳性で、イギリス貴族の三男と愛を育んだ上で、駆け落ち同然の結婚をした（ロマンティック・ラブの成就）後にどうなったか、という話である。夫は死に、貧しい未亡人となったエロル夫人は、イギリス貴族である義父の身分意識と対決し、そのシンプルな道徳性——彼女が育てたセドリックを通じても表現される——で義父を圧倒する。最終的に彼女は息子セドリックとともに伯爵家に受け入れられ、幸福を手にするわけである。

5. かしの結婚

こうしてロマンティック・ラブ・イデオロギーを内面化した大川＝島田かしは、自身の結婚についても、その脈絡での配偶者選択をした。彼女は1883年頃に海軍中尉でクリスチャンの世良田亮（1856-1900）と婚約したと考えられる。1883年5月26日付けの津田梅子の手紙に、世良田氏は「今や結婚したも同然

78 1885年に始まった時習会の雑誌は残っていない。時習会はもっと注目されて良い。フェリスの生徒の文学的素養を引き出すことを学習の一環ととらえていた。時習会創設よりずっと遅れ、1889年3月に大阪の梅花女学校内で、学芸振興のため、『梅花余香』が発行され始めた。1890年1月にその続編『つぼみ』が、同志社女学校、梅花女学校、神戸英和女学校、山陽英和女学校の4校が立ち上げた「女文会」という組織の機関誌として発行され始め、2年間続いた。一方、女学雑誌社は、1890年5月に関東にある14校の女学校の連合体の雑誌『女学生』の発行を支援、女学生の文学的素養を伸ばすことを試みた。編集長は明治女学校教員の星野天知で、1892年12月発行の第30号までが知られる。文芸作品の執筆を女性の学習の一環とする発想は、時習会に始まり、1890年ころに盛んにその実践が試みられたことがわかる。一方、1892年6月から、『女学雑誌』は白表と赤表に分かれて交互に発行されるようになり、前者は、文学的関心を専らとし、北村透谷や星野天知の活躍の場となった。1893年1月末、星野天知は、『女学生』の後継として『文学界』を創刊、この雑誌は前期浪漫主義の揺籃となった。若松賤子はこの一連の流れの中に居たが、夫善治とともに、文学の使命を道徳的感化に見る立場に立ち、自らの喜怒哀楽の表現を重視する星野天地らとは意見を異にした。以上、女文会と『つぼみ』、『女学生』については、坂本清音「明治期、梅花女学校で学んだ女生徒たち」『梅花女子大学チャペル・ニュース』第13号（2017年3月17日）、3-4頁 https://www.baika.ac.jp/assets/pdf/campuslife/religion/index/chapelnews_13.pdf#search=%27梅花女学校+梅花余香%27（2020年1月3日アクセス）。國原美佐子「関西キリスト教主義女学校の「女文会」活動について」『キリスト教学校教育同盟 百年史紀要』第7号（2009年6月）、1-17頁。國原美佐子・小檜山ルイ「日本女子基督教教育会の創設と活動」『キリスト教学校教育同盟 百年史紀要』第7号、24-27頁。『女学雑誌』、『女学生』から『文学界』への流れについては、藤田美実『明治女学校の世界』青英社版、1984年、37、58-60頁。

79 若松、1890年、188-189頁。

で——日本の婚約ですよ、おわかりでしょう——、私はその婚約者と会いました。彼女は良い人で、きれいで、英語を話し、クリスチャンです」とある⁸⁰。梅子が「日本の婚約」としているのには疑問があるが——クリスチャン同士の婚約は典型的な日本の婚約とは違った——、梅子が会ったのは、かしであろう。世良田は信州上田の士族で、海軍兵学寮に進学、海軍省の第1回米国留学生の一人として1875年6月から6年間、メリーランド州のアナポリス海軍兵学校で学んだクリスチャンであった。上田は1876年にミラー夫妻が伝道し、教会が形成された、ミラー夫妻には馴染みの深い場所である。世良田はアナポリス時代から津田梅子とアメリカの養母ランマン夫人を見知っていたようで、ランマン夫人にとっては梅子の結婚相手にふさわしい人であった⁸¹。ミラー夫人の眼鏡にも適ったことだろう。婚約はミラー夫人が取り持ったことではないか。婚約後、すぐに結婚しなかったのは、おそらくかしには給費生として、卒業後学校に奉職する義務があったからだろう。この義務は明文化されていたわけではないが、暗黙の期待と了解があった⁸²。また、かしにとってより重要だったと思われるのは、ミラー夫人が、女性宣教師は最低5年間は勤務を放棄すべきでない（つまり、結婚できない）と考えていたことである。ミラー夫人自身、結婚後もフェリス・セミナリーの仕事を続けた理由の一つに、そのことがあった⁸³。かしは、1882年に卒業し、教員となったのだから、1887年までは教職を離れられないことになる。坂従やすの例に見られるように、当時のクリスチャン同志の「愛ある結婚」においては、長い婚約期間は決して珍しいものではなかった⁸⁴。

しかし、この婚約は解消され、世良田は、女子学院出身でアメリカ留学を経験した菅野のぶと1887年3月に結婚した。1887年はちょうどかしの奉職五年目である。しかも、このおそらく前年には、上に述べたように、ニューヨーク市の改革派教会がかしの「宣教師」採用を決定した⁸⁵。彼女は決断を迫られたであろう。そして、婚約解消となった理由を、後に彼女は、「世良田さんは大変立派ないい紳士ですけども、どういふものか妾には、小説に出て来るような愛情がどうしてもあの方に湧かない、それではあの方を偽ることになるから婚約をやめた」と夫の巖本善治に語ったという⁸⁶。これを巖本の正確な記憶とすれば、実際、かしが小説を通じてロマンティック・ラブを学び、また、自ら実践しようとしていたことの証拠になる。彼女は自分の感情に重きを置いた。それが、母娘のように親密な関係であった

80 Furuki, p. 73. なお、尾崎のみは、婚約を1886年としているが、それでは婚約とその破棄の間が短すぎると筆者は考える。当時のクリスチャンは婚約期間を長く取り、互いの理解を深める努力をする傾向があった。もっとも、内村鑑三と浅田たけのように短期間で結婚して失敗した例もいくつかあるが。

81 尾崎、70頁。

82 1898年1月、オランダ改革派東日本ミッションは、フェリス・セミナリーの給費生は、卒業後2年間、ミッションの監督下で働くことに同意する文書に署名し、保護者の同意文書も提出することを義務付けると決定した（“In the Matter of Supported Pupils in Ferris Seminary,” (n.d.; probably, autumn or winter 1898) in RCA Letters）。当時の校長ブースはこれに大反対であり、当初はもっと長かったお礼奉公の期間を短くしようと努めた。

83 フェリス女学院資料室編、155頁。

84 他にも、田村直臣は婚約者のゑい（女子学院生徒）を結婚前に留学に出している（田村ゑい「昔かたり」『築地バンドの研究』日本キリスト教団巣鴨教会、1986年、33-76頁）。

85 1887年の年次報告にこのことが掲載されたということは、その前年に決定された可能性が高い。

86 尾崎、80頁に引用されたものを使用。

ミラー夫人の勧めをも拒絶し、夫人を落胆させることであったとしても。

婚約解消の背景には、かしが巖本善治に出会い、惹かれていったこともあるだろう。かしがいつ巖本を知ったかは定かではない。1885年に大川から島田姓になり、秋にフェリス・セミナリーに時習会を設立し、その機関誌を発行し、1886年1月25日付けの『女学雑誌』に「時習会設立の趣意」が掲載された頃と推定される⁸⁷。巖本善治によれば、「私がやってある『女学雑誌』が女の位置の向上といふ事を目標にしてみたのに感激し、女の為に有難いことだといふので先方から私の処へ訪ねて来ました」という⁸⁸。1885、6年当時の島田かしの積極性が窺われる。

1886年10月の『女学雑誌』第37号に、若松賤子は、その年の8月にコレラで急逝した明治女学校の創立者木村とう子の死を悼んだ英詩を（In Memoriam）発表した。島田かしが木村とう子と直接会ったことがなかったことは、詩の中で暗示されている⁸⁹。一方、巖本善治はとう子を母のように慕っていた。この詩は、島田かしが巖本善治を通じ、とう子の来歴と仕事を知ったこと、そうした交流が島田と巖本の間にあったことを教えてくれる⁹⁰。同時に、若松賤子は、この詩を、とう子の死を悲しむ巖本善治に同情し、巖本を意識して書いたと見える。巖本善治による「木村とう子の伝」の最終回と同じ号に掲載されたこの詩は、若松賤子から巖本善治へのラヴ・レターと言っても過言ではないのではないか。若松は、極めて暗示的に、「あなたは私と志を同じくするお方」、「私の霊とあなた様の霊と、永遠に交流し合い一つとなれますように」などと、明治女学校経営の端緒で亡くなった木村とう子の後継ぎにならんとする意思を表現している⁹¹。1887年、巖本善治は、『女学雑誌』の編集人と明治女学校教頭を兼ねるようになる。島田かしの意思は、巖本善治のそれと限りなく接近し始めていたことを英詩は教えているのではないか。

すでに言及したように、巖本善治は、1886年、1887年と連続して、フェリス・セミナリーの交際会に出席し、第2回目に島田かしが出演した『リア王』第1幕の朗読劇が秀逸だったと『女学雑誌』に報告した⁹²。巖本は、また1887年にはフェリスの試験委員に名を連ねている。同じ年、妹のかめは、フェリスの予科2年生に在籍していた⁹³。一方、若松賤子の『女学雑誌』への投稿は、尾崎るみ作成の著作年表によれば、1886年に5回、1887年に8回、1888年に15回、結婚した1889年に8回となっている⁹⁴。賤子と巖本は執筆者と編集者としても接触の頻度を増していったわけである。

島田かしは、この間もフェリス・セミナリーに住み込んで教員を勤めた。もともとかしは病弱の傾向

87 「時習会の趣意」『女学雑誌』第13号（1886年1月25日）、30-32頁。

88 尾崎、63頁。

89 若松しづ「木村とう子を弔う英詩」『女学雑誌』第37号（1886年10月5日）、138-139頁。

90 尾崎、63-64頁。なお、『女学雑誌』第34号（1886年9月5日）、71-77頁、第35号（1886年9月15日）、92-95頁、37号、137-189頁に巖本善治は「木村とう子の伝」を連載した。かしはこれらを読んで木村とう子への理解を得たのはもちろんのことである。ただ、筆者は島田かしが巖本から直接とう子のことを聞く機会があったと想像したい。

91 尾崎、67-68頁に引用された佐藤恵子の翻訳を使用。

92 尾崎、81-82頁。交際会については、小檜山、2016年、42-44頁も参照。

93 フェリス女学院150年史編纂委員会編、2012年、18、33頁。なお、1887年度在籍者の表で、巖本の妹は兵庫出身の「石井かめ」と登録されている。

94 尾崎、400-401頁。

があったが、1880年代後半の教員不足の時期にかなり無理をして学校を支えた⁹⁵。冒頭に示したように、1889年年頭に咯血を繰り返した。巖本善治との結婚は、したがって、病にも関わらず決行された。島田かしは、育んだ愛を困難を乗り越え貫く結婚という形を体現してみせたわけである。

島田かしと巖本善治にとって、冒頭に挙げた結婚式は、一種悲壮な決意を帯びたモメントでもあったろう。その日、巖本かしは、夫との共同の日記に、アメリカの詩人、アリス・ケアリ（Alice Cary, 1820-1871）の“The Bridal Veil”という詩を書き付けた。この詩は、第1スタンザで、花嫁のヴェールを取ってありのままの自分を夫に見ることを要求し、第2スタンザでは、ヴェールの下に隠された自分は、「光の如くさとくして、きみにひろげる力」があるが、「その飛ぶ時は速くして 君は遂い行くことを得」ないと自己の力と自由を謳歌する。しかし、第3スタンザで、一転「われを取るを恐れ給うな」と夫に求め、「生ある限りわれはきみのものなり きみの思うがままのものとならん 結婚のしるしとして 覆いとして わが白きヴェールをまとわん きみはわが主 愛しき人なることをあかしせんがため そは消えされし平和を覆うもの また筆舌に表せぬ恵みのしるしなり」と結ぶのである⁹⁶。

アレクシス・ド・トクヴィルは、1830年代にアメリカを視察して書いた『アメリカのデモクラシー』の中で、アメリカの女性について次のように書いている。

アメリカでは、女性の独立は婚姻の絆の中に消えて帰らない。若い娘は他のどこよりも束縛を受けないとしても、妻はどこにもましてきつい義務の下におかれる。前者にとって父の家は自由で楽しい場所だが、後者は夫の住まいで修道院の中のように暮らす。

二つの状態はこれほど異なるが、両者は人が思うほど相反するものではおそらくなく、アメリカ人はごく自然に一方の状態からもうひとつの状態に移行する。

トクヴィルによれば、この変化は、世論が強制するというより、女性たちが自分の意思で引き受けたものであった。アメリカの女性は、娘時代に、世間を自由に観察することを許されて、理性を養い、浮ついた独立心は結婚生活の阻害要因になり、娘時代の楽しみは妻の気晴らしにはならないことを知る。だから、一旦結婚したら、家庭の幸福を導く一筋の道に邁進する。アメリカの女性は、結婚に意志をもって臨み、妻という立場の義務に服して嘆くことがない。そして、人生の苦難に際して、その意志が発揮される。

私はしばしば荒野の涯で、ニューイングランドの大都会の洗練の中で育った若い娘が、豊かな親の

95 病弱だったことについては、1879年12月ごろにミラー夫人に宛てて書いた手紙に、医師の指示で毎日肝油を飲み、健康状態がやや改善したとある（*The Mission Monthly*, Vol. 3, No. 1 (Apr. 15, 1880)）。学校を支えたことの一例を挙げれば、かしは、英語、日本語両方の授業を満足に担当し、1887年には翌年の恩師休暇を返上することを決断、1888年には、生理学、読み方、作文、翻訳を担当し、教員不足のフェリスの運営を助けた（フェリス女学院150年史編纂委員会編、2015年、47、53、57頁）。

96 アリス・ケアリについては、尾崎、98-99頁を参照。元の詩は、『女学雑誌』第172号（1889年7月28日）、15頁。翻訳は、野辺地清江『女性解放思想の源流』校倉書房、1984年、224-226頁。また、小檜山、1992年、271-273頁も参照。

家を出て、ほとんどそのまま、森の中の掘っ立て小屋に移住してきたのに出会ったものである。興奮も孤独も倦怠も彼女らの勇敢な精神を挫くことはなかった。顔つきは代わり、やつれては見えませんが、目つきはしっかりしていた。悲し気ではあったが、毅然としていた⁹⁷。

アリス・ケアリの「花嫁のヴェール」はこのトクヴィルの観察したところを女性の側から表現したものに他ならない。島田かしは、アメリカ的「ロマンティック・ラブ」による結婚がほとんど必然的に求める責任を容易ならざる覚悟をもって引き受けたのである。

おわりに

結婚後の巖本かしが結核が進行するなか、明治女学校内に住み（一時離れたこともあったが）、文筆活動を続け、七年ほどのうちに三人の子を産み育て、四人目を妊娠したことはよく知られている。本稿の趣旨からすれば、この間、彼女がどのような「ホーム」を営み、どのような「ホーム」像、女性像を発信したかは、当然問われなければならないが、それは、機会があれば稿を改めることとしたい⁹⁸。ここでは一言だけ付け加えておこう。残されたかしの写真が伝える勝ち気な雰囲気、また、執筆活動を継続したこと、かしは夫と対等に渡り合った、自己主張の強い妻だったという印象を持ちがちである。星野天知が初めてかしと会ったとき、巖本善治について、「彼を買被ってはいけません。後悔をしている私の実験があります。」と言ったという星野天知の回想の存在、また、島崎藤村による、「束ねた髪に紅い薔薇の蕾を挿して居るような人」というかしのイメージは、こうした印象を強化する⁹⁹。しかし、おそらく、巖本かしは、トクヴィルの描くフロンティアに移住した女性のように、むしろ夫の提供する環境に意志をもって適応しようとしただろう。文筆活動自体、自己実現であると同時に、夫が『女学雑誌』を出す上で、必要だった「内助」の一つでもあった。何よりも、病身にもかかわらず相次いで出産したことは、夫の性的要求にかしが応え続けたことを示す。つまり、ダニエル・スコット・スミスの言う「家庭内フェミニズム」——一九世紀を通じ、アメリカの女性の家内における権力は増し、女性が産児制限をリードするようになった——が¹⁰⁰、巖本家では機能していなかったということになるだろう。

(こひやま・るい)

東京女子大学現代教養学部教授

97 トクヴィル（松本礼二訳）『アメリカのデモクラシー』第2巻（下）、岩波文庫、2008年、第10章。引用は、75、78頁。

98 筆者は1990年の博士論文において、この時期の巖本かしについてある程度の考察を加えたので、近い将来再考を試みたい。

99 星野については、野辺地、130頁。島崎藤村「桜の実の熟するとき」『藤村全集5』筑摩書房、1967年、532頁。

100 Daniel Scott Smith, "Family Limitation, Sexual Control, and Domestic Feminism in Victorian America," *Feminist Studies*, Vol. 1, No. 3/4, Special Double issue: Women's History (Winter-Spring, 1973), pp. 42-43. 白人女性一人あたりの平均出生数は、1800年が7.04人、1840年が6.14人、1880年が4.24人、1900年が3.56人であった。